不審死、というのは『遺体の状況が不自然である、または死因がはっきりせず、病死や自然死だと断定できない死亡』のことだと知った。

そういう言葉があることは知っていたが、改めてその詳細を調べることになったのは、それが妹の死因だからだ。

車に乗って来なくてよかった。そうしていたら、まず間違いなく事故を起こしていただろう。

車窓の外に流れる久方ぶりの都会をぼんやりと眺めながら、思う。

×　×　×

霊安室に通された。ひんやりとしていた。

妹の遺体は白い布に隠されていた。姿を隠すという行為は、死者に対する礼儀の現れだとなんとなしに思った。

「綺麗な、ご遺体です」

看護婦さんが言った。その言い方が妙に気になったが、確かめたさが優先された。

布の端を掴む。掴んだまま、止まってしまう。本当に死んだと知るのが怖くなった。

どれだけの間そうしていたのかわからないが、その間、看護師さんは何も言わないでいてくれた。ふとした瞬間に、覚悟が行動へと実った。

ゆっくりと、めくった。そうした瞬間、看護婦さんの息を呑む音が聞こえたような気がした。

「え？」

妹の表情はとても穏やかだった。眠っているように見えた。そう見えたのは顔色が死人特有のそれではなく、生気に満ち満ちたものだったから。しかし、たしかに肌は冷たかった。

そのふたつのあまりのちぐはぐさに困惑する。

「妹は本当に死んでいるんですか……？」

「……はい。心臓は止まっています」

「何があってこうなっているんですか……？」

看護婦の代わりに、いつの間に表れていた警察が言った。

「彼女は、ビルの屋上で横になっているところを発見されました」

「……警察の方が、どうして」

否が応でも悪い予感を感じてしまう。嫌な想像をしてしまう。

「彼女は血でできた水たまりの中で、眠るように亡くなっていました」

何も言えずに閉じたままで口が固まる。脳が、まったく嘘を言っているように見えない男の言い分を咀嚼し呑み込むまでに十秒ほどかかった。

「はぁ？？？」

それでもなおまともな言葉を発せなかったのは当然だろう。